

やまと 民俗への招待

それは突然目の前に現れた。身の回りの物を整理していた母親が、着物などと一緒に、2年前の正月に妻に渡したものだった。大正8(1919)年生まれの亡くなった父親が海軍時代に作ったものだという。色違いの桐箱が向かい合う絵柄が丁寧に刺繡されている。母は言った。父は「朝霧」や「夕霧」などの駆逐艦や潜水艦に乗り、何度も金鷲勳章をもらつた、とも話していた。ミッショウ、ガダルカナ

ルと負け続け、海に投げ出され、サメに食べられないためにフンドシを後ろに流しながら泳いだとも語っていた。戦争末期には乗る艦船もなく、海軍陸戦隊の一員としてフリーピンで敗戦を迎えた。

師団2600人のうち生還者8人という過酷な体験を経て復員した後、長い間、夢でうなされ続けていたといふ。16貫(1貫は3・75匁)の体が10貫にな



縦16cmあまり、横13cmほどの縫の端切れに
刺繡した「縫刺し」=筆者提供

戦場から届いた刺繡

ついで、米軍の軍服を着が、縫刺しは復員時で

現役兵として入営した後、妻へ縫刺しの財布を作っていた。流行の

縫刺しは、夏の着物地の縫を用いてする刺繡で、奈良時代から行われ、明治以降も盛んだったという。『暮しの手帖』の編集長を務めていた花森安治も、現役兵として入営した

趣味としてより、兵士たちの心を落ちさせ、同時に緊張感を持続させ、いざという時に出動できるよう精神管理の一つとして軍隊で推奨されていたのかかもしれない。父親が静かに針を運んでいたのは、沈んだどの船だろう。他の兵士はどうな刺繡をしていったのだろうか。「聖戦」に庶民が強引に巻き込まれた時代を伝えこの刺繡を、以来身近に置いている。

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)